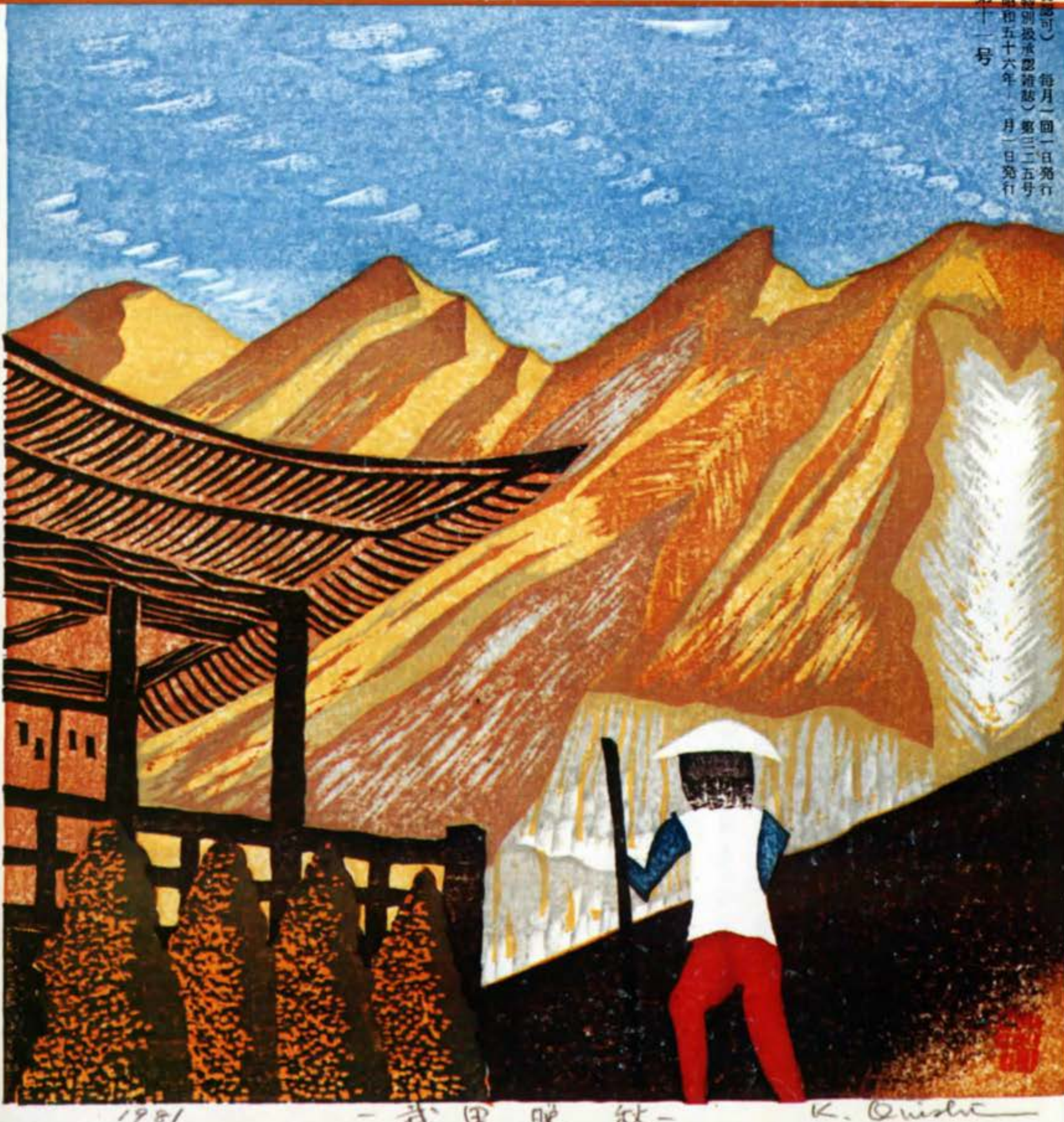
淨土

1981－11

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌）第三二五号
昭和五十六年十月二十五日印刷 昭和五十六年十一月一日発行
第四十七巻 第十一号



1981　－武甲晩秋－　K. Onishi

いくたびか暮らし、明かさん

ことしも、あと一ヵ月あまりを残すだけとなった。

毎年のことであるが、年の初めに、ああもしよう、こうもしようと高邁な目標を立てる。ところが、この時期に振り返えり、思うことは、その目標とはほど遠い、ほとんどが腰くだけの惨憺たる結果に終っていることに気付かされる。こうした思いは、大なり小なり、どなたにでもあると思う。

これは、気付くと気付かざるとにかかわらず、なんとなく妥協し、なんとなく軌道修正をしてしまった、人間の弱さ、怠け心のなせる業といえよう。

それでは、人間は怠けるために生きているのかというと、決してそうではない。だれしも精一杯生きている。生きようと努力はしている。ただ精神的な面は、形として表現しにくいために、どうしても弱気になりがちとなってしまうことになっているだけだと思う。

人生を、なんの苦労もなく、思うがままにくらせればこれにすぎたることはない。だが、ただ一人、泰然自若として生きぬけるほど人生はあまくなく、それほど人間は強くない。

そう思うとき、法然上人の人生訓

「昨日もいたずらにくれぬ。今日もまた空しく明けぬ。いまいくたびか暮らし、いくたびか明かさんとする」

の名言が頭をよぎる。

一歩一歩、一日一日の平々凡々たる生きざまの中に、ともに生き、生かされている人生。その人生を、自分ひとりでは生きぬけない、なに一つ出来ないことを自覚して、ことしの目標の一つでも為しとげるよう、最後の努力を誓って、反省の言としたい。

（長谷川宣丈）

十一月号

雑善はこれ小善根なり。念仏はこれ大善根なり。

——『選択本願念仏集』

（定本法然上人全集１　p.183）

目　次

青少年教育の原点

教育雑感……………………………………上　田　祐　規……（2）

七五三俳談…………………………………細　田　隆　善……（7）

ずいそう　「つくづく」法師抄②

欣求浄土……………………………………真　野　孝　信……（12）

＝シルクロードの旅＝

砂漠の風物と敦煌＜Ⅱ＞………………………山野井　貫　琇……（16）

—「莫高窟」管見—

随筆　日本よい国……………………………大　成　善　雄……（34）

＜読者のページ＞

祖母の信仰…………………………………竹　内　尚　三……（27）

＜童話シリーズ＞

おじゅうやまんじゅう……………………布　村　哲　哉……（22）

浄土句集……………………………………一　田　牛　畝　選……（30）

＜表紙のことば＞武甲脱秋………………………大　西　耕　三……（32）

＜表紙裏・巻頭言＞いくたびか暮らし，明かさん…長谷川　宣　丈

念仏ひじり三国志⑽——法然をめぐる人々………寺　内　大　吉……（38）

表紙　大西耕三画

カット　大正大学美術部

◇◇◇青少年教育の原点◇◇◇

教育雑感

上田祐規（うえだゆうき）
（鎮西学園理事長）

気象台の長期予報のごとく今年の夏は厳しい暑さでした。「天行は健なる」が宜しく、冬は寒く、夏はやはり暑いほうが快よい気がいたします。

シーズンオフの冬期、基礎訓練に満を持していた学園のスポーツ活動は、水温む頃から脚光を浴びてまいります。ここ十年ばかり鳴かず飛ばずの野球部が、特に本年度に入り力をつけて、春の県大会優勝、佐賀で開かれた九州大会でベストフォアに入り、今までの劣勢を一挙に吹き飛ばす活躍を示して俄かに活気づいてきました。

高等学校での部活動という点からみれば、どの部の活動も全く同じであります。しかし

ながら世間の人気というものは甚だ無責任で野球に傾斜してしまうのであります。他の部が全国大会に出場しても野球ほど騒がないのであります。同じ生徒の部活動としてこれほど不公平はないのであります。私ども学園当事者の悩みの一つであります。その意味で私は平素どの部でもよい、りっぱな部活動をしてくれさえすればよい、必ずしも勝ち負けにはこだわらないという気持で生徒に話もし、接してもきていたのであります。余りにも勝利第一主義による諸々の弊害が今日生じていることは周知の通りであります。勝つためには手段を選ばず式の非教育的な面が押し出され、そのために生徒はおろか親までも惑わさるる事態も起りかねぬのであります。スポーツの意義も、高等学校部活動の目的も遙か彼方に押し流されて歪められた形になって、やれ勝った、優勝したとしても大したことではないのであります。

春の優勝に勢いづいた野球部が、今夏の大会にも優勝してしまったのであります。心ならずも他校並みの甲子園出場準備をせざるを得ない仕儀になったのであります。過熱気味の高校野球でありますから、華美にならぬようにと考え、先ず第一に決して無理な寄付集めをしない。第二に他の部のことを考えて、野球部員を特別扱いにしないということを基本として諸準備に当ったのであります。お蔭様で甲子園ではベストフォアに残る大活躍で、まことに予期以上の好成績を収め得たことを喜んでいます。それにしても、この活躍以上に嬉しかったことは野球部員六十名全員が、出場選手であろうと控え選手であろうと、一年生から三年生までの全部員が極めて仲良くりっぱな態度で懸命に努力したことであります。高校生としての勉学に努力することはもちろん、きちんとした日常生活態度をもってスポーツ活動をやること、これが「ほんもの」であるとかねがね指導していることが、少しでも報われたような気がするのであ

ります。
教育の分野は今日、胎教に始まって、老人教育に至るまで人間として生きている間は、すべてというくらい広く普及していますが、なんといっても最も大切な時期は、生まれおちて未分化の幼児期から、小学校、中学校、高等学校の時期であろうと思うのであります。頭脳の最も柔軟にして発達するこの時期は、この後の社会生活の基盤確立、人間形成の最重要期であります。
よく言われるのでありますが、高校時代に失敗またはうまくいかないことがあると、それは中学時代が悪かったからだといい、中学時代が悪ければ、それは小学校時代が、同様にして幼稚園時代がと言われます。そうなれば、最も大切な時期は乳児期から幼児期の時代ということになってきます。昔から「三つ子の魂百まで」といわれておりますことも、この意味から宜なるかなと思われるのであります。
この点について、今年の夏、いやという程体験させられたのであります。甲子園へ数回往復したのですが、空港や駅の待合室といった大ぜいの人々がいる場所での、公共心のない子供たちへの躾のなさに驚いたのであります。都会の狭いアパートからの解放、夏休みの嬉しさ等々は理解出来ないこともないのでありますが、公共の場所で人の迷惑なぞ全く無視した子供の行動に無関心な親たちの何と多いことか。金切声をあげ、空港ロビーをわが家の居間よろしく全力疾走、他人の迷惑無視、列車座席を飛び移る傍若無人。親は見ていて知らん顔、子供だから仕方がないと言わんばかりであります。昨今は進学率が向上して高校卒は殆んど、大学卒の母親も相当数いて、戦前に比すれば、その教養も格段の違いがある筈であります。しかるに公共の場所で他人に迷惑をかけっぱなしでいる我が子をにこにこ笑って見過しているこの無教養、無神経を思うと、大学出とか、進学率の向上とか

も絵空事というのでしょうか。古い時代といわれる戦前には、今日ほど学問をした母親は少なかったのでありますが、子供の躾といった、社会生活の基本面の教育については、ずっとしっかりしていたようであります。今の若い母親には、もう自分のことしか何もないという感じがしたのであります。またそれを同じように眺めて、わが妻の顔色のみみて、知らんふりの父親の権威のなさ、これが一番なさけないことかも知れません。

私ども一億を超す日本人は、好むと好まざるとに拘らず、この狭い国土に生活する共生きの団体であります。今日のようにいわゆる文明開化の快適な社会生活を営めば営むほど、私どもはその裏面に隠れて見えない、そして私どものともすれば忘れがちな、「支え」を知らなければならないのであります。複雑な管理社会になればなるほど私どもはより以上にこういう陰に隠れた人々の尽力を感謝して生活していかねばならないのであります。

今日、国防論議も漸く盛んになってまいりましたが、このように社会生活の基本もシツケず、自分のことばかり考えて、エゴをぶっつけ合っている勝手な国民でも究極的には身命を賭して国を守らなくてはならない自衛隊の方々、私どもは厚く御礼を申さねばと思う昨今であります。私どもは健全な社会を希求する社会の一員として、これからは徒らに拱手傍観することなく、シツケをしない親に代わって社会道徳を身につけさせるべく直接指導にのり出さねばならない時期が到来したと思うのであります。

子供の成長段階において、ものの分別がつかない未分化の時代は別の面でまた非常に可愛いい時期でもあります。従って親は、その可愛さのみに溺れて、過保護に走り、悪いことをしても手もあて得ぬ甘さになりがちであります。たとえこういう時期であっても是は是、非は非で、きちんと躾けるときは厳しく躾けねばならないのであります。子供の言う

なりの過保護にしておいて、自我がめざめ、言うことをきかなくなった中学、高校時代になって急に厳しくしたり、体罰を加えたりするから、ますます子供は親から離れて反発すると思うのであります。

　ひとりの人間が、この世に生を享けて社会人として成長していくのに最も肝要なことは「自立」ということであります。この自立ということを蝕むのが「過保護」なのであります。過保護に蝕まれた人は今日の複雑な社会状勢のもと自己主張一辺倒で、自立のための苦しい忍耐心が稀薄になっているのであります。戦後のわが国の教育には、明るい、平和な伸び伸びとしたいい面も多分にありますが、また反面悪い点も多々あるのであります。既にこうした自己中心のわがままな甘え心をもって成長した人々が今日の社会を支える時代に立ち到っているのであります。いわゆる「現代っ子」がもう大人となって子供を育てているのであります。大人の根元は常に子供時代に在るということからすれば、社会生活の基本も躾けられていない子供が今日氾濫していることも頷けるのであります。

　今日、青少年の非行が憂慮されていますが、私ども大人の処生態度如何も充分反省せねばならないと思うのであります。ひとりの人間が一社会人として自立するまでの過程は、人間の発達段階において肉体的、心理的にも当然通過すべき関門があります。中学時代のいわゆる「ギャングエイジ」の第一反抗期、第二次性徴に伴なう高校時代の第二反抗期も人間として自然のことであります。この原点に立って学校も社会も総力を挙げ寛厳宜しき指導をすべきであります。自分の子供を邪魔物扱いにし、大人のエゴで処生する大人が減少しない限り青少年の非行は決して減らないと思うのであります。圧力をもって子供を抑えるだけでは青少年の問題は決して解決しないと思うのであります。私ども大人の大死一番の奮起が最も大切と思う昨今であります。

七五三俳談

細田隆善
（東京三好勢至院住職
深川芭蕉記念館主任、俳号豊明）

◎七五三の由来

「七五三」は正しくは「七五三の祝い」であるが、略して七五三という。子供をもつ家庭では、三歳、五歳、七歳の子がいれば、十一月十五日に七五三の祝いをする。これは現在もっとも普及したほほえましい民間行事である。子供の健康、成長、幸福を願い氏神に参詣する行事である。俳句の季語として親しまれている。

子供は成長するに従って、衣類が変る。これはまた親にとっては楽しみである。江戸時代から、髪置（かみおき）、袴着（はかまぎ）、帯解（おびとき）などの行事がさかんになり、近世になって十一月十五日の七五三に定着した。男女三歳になると紐解（ひもとき）を祝い、紐を使わないで幅広の帯をつけるようになる。男子は五歳で袴着の祝いといって袴をつける。男女七歳になると幼児の段階が終り、氏神に参詣して氏子入（うじこい）りを祝うことになる。このような子供の成長の過程に折目をつける行事が、明治時代になって統一され、七五三の民間行

事となった。さらに大正時代、昭和時代になって、呉服屋やデパートなどの衣類販売の宣伝と相まってますます盛んとなった。七五三という俳句の季語は、江戸時代にはなかった。

七五三詣り合はして紋(もん)同じ　虚子
胸せまくはこせこはさみ七五三　虚子

七五三祝ふ今日なる菊日和　長
行きずりのよその子の七五三　風生
七五三子を囲みをり家族寮　桂水
七五三日輪神田の坂に落つ　岩雄
母系の声七五三に美(は)しく澄む　友次郎
北国の瞳(め)と髪黒き七五三　友次郎
上の子の大人ぶりたる七五三　豊明

◎七五三

七五三の行事が、十一月十五日に一括して行なわれるようになった由来の一つは、将軍綱吉の子の徳松の祝いをこの日に催したからである。たまたまこの日が鬼宿日(きしゅくにち)に当った。鬼宿日というのは、毎月二十八宿(しゅく)の日をあてていくとこの日が鬼宿日であった。鬼宿日は二十八宿の中で大吉日、婚姻以外は全て目出度い日である。この徳松祝いの日が、以来江戸に広まった。江戸は諸国からの集まりが多く、幼児の祝いもまちまちであった。それがこのことから十一月十五日に定着するようになった。江戸においてこの日もっとも参詣の多い神社は、赤坂山王(さんのう)

神社、神田明神、芝神明社、深川八幡の四社であった。
近年東京では明治神宮が最高に賑わう。

母と子とまれに父と子七五三　桜坡子
石地蔵の袖の長さよ七五三　草田男
工事事務所の下を通りて七五三　秋を
七五三石段天に到りけり　里井
池の鴨しづかに遠く七五三　吉男
子が無くて夕空澄めり七五三　麦丘人
もう一つ父の掌が欲し七五三　寒林
子の髪を編みそめにけり七五三　想白
わが窓の外は詣で路七五三　有紀子
細き長き露地だし抜けの七五三　けいし
七五三鳩に気をやる男の子　豊明

◎千歳飴

七五三の宮詣りには一様に千歳飴を買い、親戚、近隣に挨拶して配る風習がある。千歳飴は、もと神田明神境内で売っていた祝い飴がはじまりである。千歳飴には、子供の息災長寿を願う意味がこめられている。大きな千歳飴をひきずるように持っているのは愛らしいものである。

七五三の飴も袂もひきずりぬ　種茅
振袖の丈より長く千歳飴　友二
幼子の持てば地にふれ千歳飴　千種
千歳飴さし出す仕草の母に似て　豊明

◎下元の節

下元の節は、**下元節**、**下元**などという。陰暦正月、七月、十月の望の日の十五日を三元といい、それぞれ上元、中元、下元という。上元は十五日正月、中元は盆の十五日であって、現在でも民間行事として習慣づけられている。ところが貞享二年（一六八五）の『日次紀事』によると「十一月十五日を下元の節」とあるところから、本来は十月十五日であったが十一月十五日になったものである。この三元思想は中国北魏に始まる古いもので、満月を中心とする古代暦星に由来するのである。中国で

は下元日に先祖を祀ったものである。また中国道教では天官、地官、水官の神々を祀り、それぞれ上元節、中元節、下元節とし、下元節には水官の神すなわち水の神を祀り、水災をのがれることを祈った。しかし三元はそれぞれ季語ではあるが、下元の句はない。

◎髪置

髪置は**櫛置**ともいい、俳句の季語、七五三の起源である。昔、幼児は男女とも二、三歳までは頭髪を剃っていた。それ以後になると頭髪を伸ばすようになる。このときの祝いの式を髪置、櫛置という。後水尾天皇は満二歳の暮に櫛置をされたとある。

髪置の式は、頭に白粉を塗り、綿帽子をかぶせ、櫛で鬢を三度掻く儀式である。この綿帽子は白髪綿ともいい、白髪の垂れた形で、子供の長寿を願ったものである。『江戸年中行事』によると、髪置、櫛置は多く十一月十五日に行なわれた。

髪置や父に似そむるうしろ附　呉夕
かみ置や稚心の奢りそめ　素丸
髪おきやうしろ姿も見せ歩く　太祇
髪置や三つ子に言はす思ひ夫　太祇
よくころぶ髪置の子をほめにけり　虚子
髪置や櫛の歯をひく鎮守道　分香
髪置の白粉の児に触れし幣　楽天
髪置や白粉つけし髫の子　五岳

◎袴着

袴着は、幼児が童児になってはじめて袴を着ける祝いである。上代では男女ともに袴を着け、三、四歳または六、七歳でこの祝いを行なった。『源氏物語』によると光源氏は三歳になったとき袴着を行なったとある。近世では男子五歳に袴着、女子七歳で紐解の祝いをした。

袴着の式は、五歳の男子を吉方に向わせ、麻の裃をつけさせて袴をはかせる。式後氏神に参詣し、親戚を招いて披露祝宴をする。この式は十一月中に行ない、始めは日が定まっていなかったが、のち十一月十五日定着した。男子の七五三の祝いが五歳になったのは、この袴着

に由来する。近年は男子五歳の七五三に洋服や変った服装をさせる向きもある。

袴着や娘の子にもはかま哉　其角
袴着や石段下りて茶屋に入る　紅酔
袴着や我もうからの一長者　虚子
袴着や銀杏吹き散る男坂　鳴雪
袴着や寒紅梅の花衣　癖三酔

◎ 帯解（おびとき）

帯解も俳句の季題、帯置（おびおき）、紐解（ひもとき）、紐落（ひもおち）、紐置（ひもおき）などという。童児の着物についている付紐（つけひも）を取って、帯を使用する祝いである。帯解は現在女子七歳を定説とするが、昔は男女九歳で行なった。のち男子は五歳、女子は七歳となった。

帯ときも花橘（たちばな）のむかし哉　其角
帯解や立居つさする母の親　鬼城
帯解や唄の師匠に養はる　右衛門

◎ 被衣初（かつぎぞめ）

女子が五歳または七歳になると被衣を着せた。被衣には帯をしない。外出するときに単衣を頭にかぶり、長さは身体に等しくして、顔を見せないためであって、礼服ではない。十一月十五日に女子の被衣初をした。

七五三は、古来からの髪置、櫛置、帯解、被衣初の祝いが定着したもので、現在では男子は五歳、女子は三歳及び七歳になったとき、十一月十五日に行なう。男子は三歳も行なうこともある。いずれにしても子供の心身ともに健全な成長を願う親の願いには変りない。F神に子供の成長を報告願うことから、七五三の参詣は神社に習慣づけられている。

（ず）（い）（そ）（う）

「つづく」法師抄（二）

—欣求浄土—

真野孝信（まの こうしん）
（八幡市正法寺住職）

紅葉前線も日毎に南下し、十一月に入って今年も亦、洛中洛外には観光客らしい団体の目立つ昨今である。山紫水明、風光明媚が看板の京都も、時の流れには抗しきれないながら、洛北、洛西、洛南や東山一帯には、さすがと思わせる洛味を呼び覚ます軒並や老舗とその軒端、菓子屋一つを例にとっても、江戸菓子の具象に対して京菓子の抽象、江戸菓子を精緻巧妙をきわめた日光の東照宮とすれば、京菓子は侘び、寂びの桂離宮と云った風情で、所謂、有職古実による礼儀、典礼の菓子や、茶道に珍重される等々、「菓匠」の一種かたくなとも云える伝承が、更には数々の名所や旧蹟とその界隈に、「古都」の味が残っている。それは、現代人にとって、誰もが遠慮なく出入りのできる人と自然の出逢いの広場であり、悲喜、苦楽、織りなす人の世の盛衰を音なく語り聞かせてくれる詩情と、歴史、哲学、宗教の宝庫だからであろう。京の四季とその推移は、幼少、青壮、熟老の人それぞれに、何かを見、何かを思い、そして何かを行う節（ふし）を与えてくれさえする恵みとも受けとれる。然し、「古都」とは云え、そのような聖域的存在のみの京都はゆるされない現代である。

他面、文化の進展、特に多様化する社会的要求に対応して、日進月歩はまさに驚異的と云っても決して過言でない科学の発達、とりわけ電子計算機を広く駆使しての合理化、所謂コンピュータリゼーションと云われるシステムの発達を度外視しては、現代産業はあり得ないばかりか、生き遂げ得ない趨勢にもあると云えよう。

去る日、私は、分析計を主体とする測定機器の専門メーカーとして、その名の知られている製作所を職場訪問する機会に恵まれて、所内の見学をさせていただいた。行き届いた経営管理その他についてはこれを省くも、業務内容は「物理、化学、医学、機械、エレクトロニクス（電子工学）の結合による新分野の開発と生産を原則として、社会の繁栄と進歩に貢献する分析計づくり」だそうであるが、自動車用、医学用、工業用、環境用、のそれぞれの多様な分野における各種の分析計、更には食品分析計にも及ぶものの説明を受けたが、一時間余にわたる見学の後、感想を問われた私は、「いやあ！専門家でない私、特に頭の弱い私には、どの機器もみな同じものとしか観えませんでした。然し、各種の機器に内蔵されている精密繊細な部品の一つ一つが、現代を生きる人間の最新鋭頭悩の綜合的集約の凝固であるように想えました。」と素直な返答をした次第であったが、まことに現代科学の断面を、垣間見程度ながら認識させていただいたのであるが、ともかくすばらしいの一語につきるものであった。

然し、成程、精密であり確実な分析であっても、その分析と測定の表示法、更にはその究明程度は、人間が、電算機に投入する資料に基づくもの――インプット――であって、電算機自体には創造力も類推能力もないこと（勿論、電算機自体に勝手な創造や類推、手ごころがあっては大変なことだが。）であるから、その基礎に寸分の誤りも許されない仕事で、機械はどこまでも人間の究明とその綜合認識の忠実勤勉なアシスタントであるが、ともかく恵まれに甘んじる私達現代人の生活の陰の力を敬謝せずにはおれない。

又、私は、所用あって淡路島に急いだ帰途、夕暗にすっぽりと包まれた海を渡る播淡の船窓から、電光の星が丘、とでも云いあらわしたいような明石の街を遠望しながら、若し、何かの原因で停電したら……と、然も広域、長時間に亘って、と想った瞬間、背に汗するような

戦慄を覚えたのである。そんな馬鹿げたことをと、自分自身が思う程馬鹿げているのかも知れないが、惨事！この馬鹿げの想い、これは絶対にないと云いきれないことなのである。これは誰もが予知することの出来ない突発事であり、仮令、それが予知し得たとしても、その予防対策のないことである。一瞬に変る暗黒。そんなに生やさしいことではない。交通機関の停止、いや、その程度ですむことでもない。もっと大変なことがおきる。食料の煮たき、湯わかしすら出来なくなる現代の生活様式、飲み水の供給さえも止ってしまうのである。この大変なことを、現代生活、今の私達人間の生きざまについての単なる杞憂であり、無用の取り越し苦労であるとさえも思うことなく、幻の豊かさに嬉遊しつづけて明け暮れる今日この頃である。

私は、近代科学の発達、それぞれの分野にわたる職業を通して、精一ぱい奉仕して下さる尊さと、その恩恵に浴して生かされていることには、心から感謝するものであるが、その恵まれた馴れきってしまった今日この頃の生きざま、その足跡を省みて、脚下を顧みないではおれない。

例えば、ビール瓶やサイダー瓶の栓すらも捨てずに貯めて回収した過去の貧しい日本、然しそこには公害問題はなかった。貧しいながらも人の世のぬくもりがあった。今や、富める日本はあき缶条例の制定に甲論乙駁して、その処理に苦慮する現状である。使い捨ての生活と思想程人間の生活を害し、社会を毒することは少い。人間をも使い捨てにしかねない風潮の擡頭を憂うるのである。

近代文明は、その贅沢(ぜいたく)な消費経済からくる廃棄物の処理、ゴミ問題すら泥沼化させていることなどは、ほんの一角一隅の問題であると云える程の数多くの大問題を、恰もボタ山のように日増しに高く積み上げてゆく。人類社会は、「高度成長、高度成長」のかけ声を合言葉のようにして、お酒(みき)の入った御輿かつぎの若衆のような調子で、破局への道を無意識のうちに急進しているようにさえ想われる。突然の恐怖――パニック――それは果果の恐慌であって、その時に臨んで、これを救うことの出来るものは存在しないであろう。繁栄の陰に地獄の予兆をすら覚える現代の生きざま。夢か幻か。寧ろ、そうであることが望ましいとも云えるのではなかろうか。なれば

こそ、高度な技術による危険の測定と認識、その危域脱出への方途の究明が要求されるのであるが、何れにしろ、砂上の高層ビルを想わずにはおれない。

先頃、盛会裡に幕を閉じたポートピア見学の可愛い少女が、マイクを差し出されて緊張気味ながら、三〇年後の日本を「科学と機械の発達によって、人間は何もする必要も感じない怠け者になってしまうと思います。」と答えるのをテレビで観ていたが、少女らしい素直さの中にとらえたすばらしいその感想に微笑みながら画像に向って深く頷く私であった。

今ここに、「つくづく」仰ぐ仏陀の遺法、今日このことあるを予知し憂いて悪世の出現を説き、その要因を五濁をもって示し、劫濁・見濁・煩悩濁・衆生濁・命濁とせられた。

劫濁―時代思潮の御指摘であり、文化の進展につれて複雑化する世態、生存競争の激化、利己追求の醜穢に濁ること。

見濁―人々各様の意見の確執によっておこる対人関係の複雑な縺れや、争諍の因ともなる見惑のこと。

煩悩濁―前二者の当然の結果からする貪欲（むさぼり）と瞋恚（いきどおり）と愚痴（おろかさ）によって、心に悩み、身を煩うこと。

衆生濁―煩悩におかされて、心鈍くなり、体の弱まりに苦しむこと。

命濁―天寿を縮めること。（自殺、他殺、事故死、近代的神経症や職業病による頓死など）

の仰せと承れば、どの一つとして、今日に無関係の説示はないことに気付かせていただくのである。

何人もこの不安汚染の穢域を脱して、安養の浄域を羨望せずにはおれなくなってくる。――欣求浄土――である。

『欣求浄土』それは厭うべき迷執享楽の海（容易にわたることの出来ない迷いに執らわれた楽しみの世界）に惑溺して、何時覚めるとも知れぬ長夜の酔夢を追いつづけている私達に、『厭離穢土』の想（醜汚に穢れた現実生活からの超脱を志す考え）を発起させる道標である。一歩一歩を称名の中に往く浄土への旅路は、本国（故郷）への帰郷の旅路である。

合掌

南無阿弥陀仏　「つくづく」法師

シルクロードの旅

砂漠の風物と敦煌——「莫高窟」管見——〈II〉

山野井（やまのい）貫琇（かんしゅう）
（長野市常然寺住職）

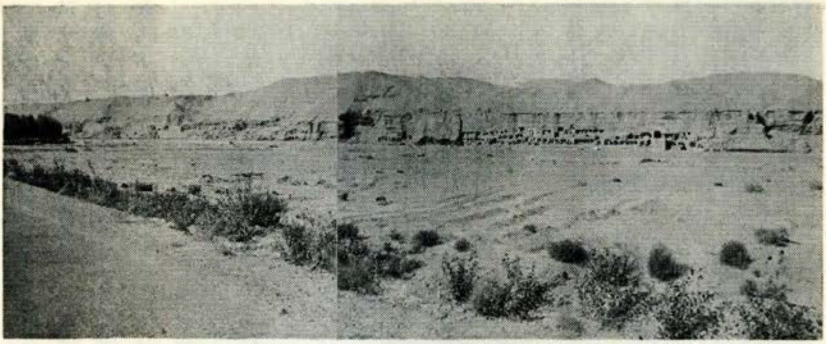
明くれば十月九日（木）待望の敦煌（とんこう）である。今回の旅に出て週日は長かった。団員の目は輝いているようにも見えた。今日こそ夢にもみた念願の敦煌にありつける。今回の団員の抱いている一番の目的は敦煌にある。これあるによって十五名の団員が日本全国から結集したのでもある。朝七時五十分車は出発した。甘新公路を左に折れて、安敦公路を今日も八十キロのスピードで走る。敦煌まで百二十キロ。余り良い道ではないが、砂漠の中の舗装道路はありがたい。今日も道の両側には駱駝（らくだ）草が点生し、時折烽火台も見え、右側に電柱が続いている。右は果てしない荒野、左に祁連（きれん）の山脈に続く三危連山が低く見えている。当地は今棉花の収穫期で、五頭だての馬車や、駱駝（らくだ）に引かせた棉花満載の車が出てくる。緑を失いかけたポプラの並木がちらほらと見えてくる。そろそろ敦煌の町も近い頃、車は急に左に折れた。いわゆる莫高窟街道に入ったのである。左に開放時間を示す文物研

究所の石碑、右足元には莫高窟まで二十五キロの道程を示す小さな石の標識が、一キロ毎に点々と立っている。右向うには鳴沙の連峯が丁度光線の具合もよく、絵のようにはっきりと浮かび、左前方に三危連山が霞んで見える。車は今その合流点に向かって懸命に走る。二十キロ程進んだ時、鳴沙山の左端に黒い四角なものが折り重なって見えてきた。左の運転手にそれを指で示し、「莫高(ばっこう)窟(くつ)?」と聞くと、無言で首を縦に振った。窟前の河らしきものに水はないが、山崖の窟は次第に判然としてきた。車の中は一段と騒がしくなった。団員の感嘆の声は互いに心の声でもあった。やがてポプラの並木を抜けると大小の舎利塔が点在している。第十七窟で世界の注目を集めた王円籙道士その他仏僧の墓塔である。車は再び右に曲がり橋を渡って牌楼をくぐると、広場の右手に停まった。九時三十分である。

　牌楼は東の入口上方に「莫高窟」の縦額、下に「石室宝蔵」の横額。内側には東を望んで「三危攬(らん)勝」の横額（何れも郭沫若

―新装なった敦煌賓館―

―開放時間を示す文物研究所碑―



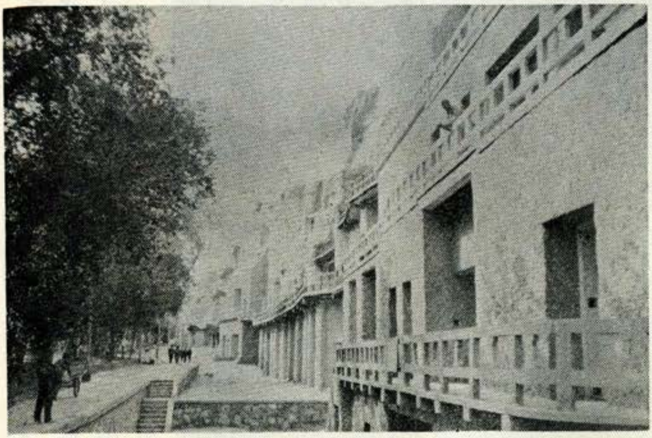
―莫高窟遠望，路傍の草はらくだ草―

氏の筆であるという）が懸けられ、屋根瓦は緑色、柱は朱塗りで午前の陽光に燦として輝いていた。下車をすると案内のまま「敦煌文物研究所」と標札のある門をくぐって中央の一棟に入った。例の茶をすすりながら、研究所の服務員趙秀英女子の歓迎のあいさつ、莫高窟歴史の概要、それに蔵経堂のいきさつ、入窟者の心得などを聞いた。いよいよ拝観である。本日の午前と午後、明十日の午前にわたって、おそらく五十窟程の扉を開いて頂いた。然し実際には扉のない所などで計百窟余は見学している。この敦煌文物とくに莫高窟については今そのブームで、既に多くの学者知識人が研究の限りをなしている。私のような浅学素人が記すことはまことにおこがましいが、折角の見学なので敢て粗感を述べてみるのである。

　敦煌は今や世界の人々が大いに注視し、遺跡文物の数多いことは私がいうまでもない。わけても莫高窟（千仏洞）はその代表である。その莫高窟が作製され、今日の名を成すには三つの条件があった。一つには東西往還の人々が必ず通過する要所という地理的なもの。一つは乾燥度の強い気候と砂漠という風土。それにもう一つは北伝大乗仏教の影響である。それに加えて土地の人々が愛情を以て育て護って来たものであることも忘れてはならないだろう。この草創については、紀元三百六十六年に僧楽僔が山に光るものを感じて、ここを宗教的霊域として第一窟を掘ったことに始まるとされている。今やポプラ、楡などの人工的防砂林の後ろには、南北千六百メートルにわたって大小限りない洞窟が掘られている。破損

甚しかったこれらの窟も文化革命の後、中国政府によって一九六三年から六六年まで大修復がなされ、主として北側四百九十二窟が復元された。その中で、現在拝観できる塑像はおよそ二千五百体、壁画総数千四十五幅で、これを五メートルの幅で横に連ねると、なんと二十五キロメートルにも達するといわれる。

—莫高窟牌楼—

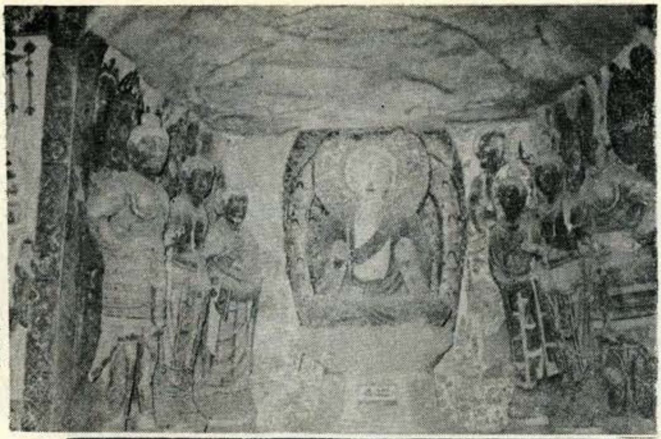


—修復された莫高窟外観
左は植樹された防砂用楡林—

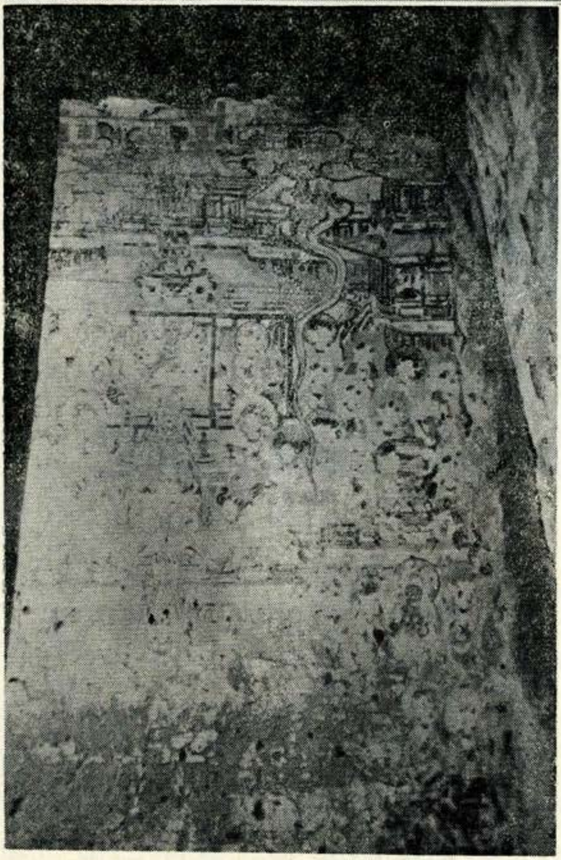
　これら数多い塑像や壁画の中、唐代の作品は塑像六百七十体、壁画二百五十幅という大きな数を占めている。

　私は今、その唐代のごく一部を管見してみるのである。この唐代はいうまでもなく中国において最も仏教の盛んな時代であった。私が一番心にかけていたのは西方浄土に関する壁画である。それは大学生時代からの引続きであり、浄土変相は唐代が最盛期で莫高窟を飾るにふさわしい質量もあったからである。それにはそれなりの素地があったことはいうまでもない。即ち近くは東晋時代敦煌出身の慧遠法師は仏教全般に通じた学僧であったが、次第に西方浄土に

興味をもち、中国浄土教の提唱者となっていった。やがて南北朝には曇鸞が出て浄土教を大成し、浄土教の祖師となった。続いて隋末から唐にかけては、日に七万遍の念仏を唱えたという道綽禅師が出現して第二祖となり、更に初唐の善導大師は第三祖であって、ご自身でも極楽浄土の変相図を三百幅も描き、阿弥陀経十万巻を書写したといわれる。更に続いて懐感、少康両師も唐代の学僧



—塑像群—



—壁 画—

であり、浄土教の宣教に身を挺したのである。このような祖師が輩出したからこそ、唐代の民衆の心底にその思想が入り込み、欣求浄土の気持ちは敦煌の壁画にも大きな影響を及ぼしたものと愚考してもみるのである。

◇◇◇〃浄土句集〃欄への投句のお願い
――及び俳文等の寄稿のお願い◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、〃浄土句集〃欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この〃浄土句集〃欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いいたします。

一、**内　容**　俳文、句会便り等の随想
一、**枚　数**　四百字詰用紙八枚半程度
一、**締　切**　毎月五日

法然上人鑽仰会

童話シリーズ

おじゅうやまんじゅう

布村哲哉（ぬのむらてつや）

「おとうさんも、おかあさんも、用事があって行けないから、きょうはけんちゃんが、おじゅうやに行ってきてちょうだいな」

と、おかあさんに云われた、けんちゃんがへんな顔をして、たずねました。

「おじゅうやって、どこへ行けばいいの」

「いつも、おまいりをするお寺ですよ」

そう云われて、首をかしげながら、また、けんちゃんがききました。

「だってさ、お月見なら夜になってから、家ですればいいじゃないか。わざわざお寺まで行くことないよ」

それをきいて、はじめは、ぽかんとしていたおかあさんも、けんちゃんの云うことが、わかったのでしょう。

くすくす笑いながら、云いました。

「ああ、それは十五夜のお月見のことでしょう。おかあさんのいうのは、お十夜ということなのよ」
「おじゅうやって、なあに」
「毎年、十月から十一月にかけて、じょうどしゅうのお寺でする、おつとめなの」
「へえー、それじゃ、おだんごを食べる会じゃないのか。つまんないの」
けんちゃんは少しふまんでしたが、それでも、お寺へ出かけて行きました。

アミダさまの前で手をあわせて、みんなにまけないくらい大きな声で、ナムアミダブツと、いいました。
おきょうが終って、けんちゃんが、かえろうとすると、おしょうさんがいいます。
「きょうは、大きな声で、おねんぶつをしてくれてありがとう。これはアミダさまからの、ごほうびだよ」
と、紙につつんだものをくれました。
「このまえは、おせんべいだったけど、きょうは何かな。おしょうさん、どうもありがとう」

けんちゃんは、ピョコンと頭をさげると、紙づつみを持って本堂を出ました。
お寺の門の前には、お地蔵さんが立っています。
おとうさんや、おかあさんと来ると、いつも手をあわせておがむので、お地蔵さんも、けんちゃんの顔は、よくおぼえていてくれます。
〃こんちわ〃とあいさつをすると、お地蔵さんもいいます。
「おじゅうやまんじゅう、おいしいまんじゅう」
「ああそうか。おしょうさんのくれたのは、おまんじゅうか」
そうおもったら、お腹がグーグーとなり、口の中では、つばきがゴクリ。
おまんじゅうは、ふたつあるようです。
食べたくなると、がまんのできなくなるのが、けんちゃん。
「ほんとうは、家へ持ってかえって、おとうさんや、おかあさんに見せてから、食べなければいけないんだけれど。ふたつあるから、ひとつ食べてもいいだろう。ぼくがもらったんだもの」

お地蔵さんの前に、こしをかけると、紙づつみをあけながら

「では、おじゅうやまんじゅう、いただきます」

お地蔵さんも、いいます。

「おじゅうやまんじゅう、まあるいまんじゅう」

それは、おいしそうなまんまるいおまんじゅうです。

ふたつにわると、中は、あずき色のあんこです。

「パクリ、ああ、おいしい」

あんこが、のどの中をとろりととろけて通りました。

お腹のすいていた、けんちゃんには、なおさら、おいしかったのです。

ふた口目を食べようとしたところへ、自転車でやってきたのは、友達のひろちゃんです。

「そんなところで、何やってるの」

けんちゃんは、いそいでおまんじゅうをかくしたのですが、くいしん坊のひろちゃんは、すぐ見つけてしまいました。

「うまそうな、まんじゅうじゃないか。半分でいいから、ぼくにもおくれよ」

「やだよ、これは、ぼくが、おしょさんからもらった、おじゅうやまんじゅうだもの」

「おじゅうやだか、じゅうごやだかしらないけど、まだ一個あるんだろう」

けれど、けんちゃんが、どうしても、あげようとしないので、

「けちんぼ、けん坊、さよなら」

といいながら行ってしまいました。

おまんじゅうを、取られないですんだので、けんちゃんはほっとして、残りをかくしながら、ボソボソと食べました。

また、だれかに見つかっては、大変ですもの。

しかし、なんとなく、おいしくないのです。さっきは、あんなに、おいしかったのにです。

「おかしいな、どうしてだろう」

首をひねっている、けんちゃんの耳に、お地蔵さんの声がしました。

「わけてあげよう、おじゅうやまんじゅう」

「なんだって、それはひどいよ。せっかく、ぼくがもらったものなのに。それを、わけてあげようなんて」

けんちゃんはうるさそうに、お地蔵さんを、にらみつ

けました。
でも、はじめは、おいしかったおまんじゅうが、そのつぎには、そんなにおいしくなかったのが、気にはなるのでしたが。
「まあいいや、お腹がいっぱいになれば、いいんだから」
そういいながら、残りを食べようとしたときです。
「けんちゃん、けんちゃん、おねがいです」
びくっとして、声のする方を見ると、けんちゃんの足もとで、いっぴきの蟻が、さけんでいるのでした。
「どうか、おねがいします。わたしたちは、これから長い冬ごもりです。少しでいいですから、おまんじゅうのあんこを、くださいませんか」
「ううん、こまったなあ。ぼくの、あんこー」
といいかけると、またお地蔵さんの声、
「あげればふえる、おじゅうやまんじゅう」
「えええっ、そんなことあるはずないよ。わけてあげれば、へるのがあたりまえじゃないか。お地蔵さん、すこし勝手なこと、いいすぎるんじゃない」
と云ってはみたのですが、くいしん坊のけんちゃんは、もしやとおもったのです。
お地蔵さんは〃あげれば、ふえる〃といっているのです。
もし、それがほんとうだったら、どうでしょう。へらないのですから、いくらでも、食べられるではありませんか。こんないいことありません。
「よし、あげてみよう」
けんちゃんは、あんこをつまむと、蟻のまえへおいてやりました。
「けんちゃん、どうもありがとう」
蟻は、そういうと、さっそく仲間をよんできて、運びはじめましたが、そのようすがとても、うれしそうなのです。
それを見ていた、けんちゃんも、たのしくなって、
「ほら、もっとあげよう。みんなでおたべ」
と、残っていた、あんこを全部あげてしまいました。
「あげれば、ふえるんだから、だいじょうぶ」
そういって手の中の皮だけになった、おまんじゅうを見た、けんちゃん。
目を丸くして

「あれー、これは、ふしぎ、ふしぎ」
ふえるどころでは、ありません。
あの、あんこのあったところが、ピカピカと、金色に光っているではありませんか。
「これは、すごい。金色まんじゅうだ。こんなにきれいな光は、見たことない。食べるのもいいけれど、こんな明るい光が、どんどんふえれば、もっともっと、うれしいなあ」
またまたお地蔵さんの声です。
「みんながよろこぶおじゅうやまんじゅう」
「ほんとほんと。お地蔵さんの云う通りだった。おまんじゅうが、ふえるのもいいけれど、明るい光がふえれば、みんながよろこぶね。残りものでわるいけど、おれいのしるしに皮のところでも、食べてください」
けんちゃんは、おまんじゅうの皮を、お地蔵さんの手のひらへ、のせてあげました。
すると、皮も金色にかがやいて、そこにはまあるい金色のおまんじゅう。
「おじゅうやまんじゅう、おいしいまんじゅう。おじゅうやまんじゅう、まあるいまんじゅう。
わけてあげよう、おじゅうやまんじゅう。
あげればふえる、おじゅうやまんじゅう。
みんながよろこぶ、おじゅうやまんじゅう」
けんちゃんは、お地蔵さんに、さよならをすると、大きな声で歌いながら、帰って行きました。
もうひとつの、おまんじゅうをだいじそうに持って。
（おわり）

＝新刊＝

《幼児用》教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共一二ページ（カラー刷）

定価三〇〇円（送料実費）

申込先──

〒102　東京都千代田区飯田橋一―十一―六

大道社

（読）（者）（の）（ペ）（ー）（ジ）

祖母の信仰

竹内省三（たけうちしょうぞう）
（キャノン株式会社常任監査役）

私の祖母は昭和十二年の残暑の頃に亡くなりました。七十歳まではあと二、三年という年でした。病名は子宮ガンで、最後の三カ月ほどは痛みが連日に増して、家中が息をひそめることが再々ありました。

臨終の三日ほど前だったと思います。祖母は菩提寺の和尚さんを呼んでほしいといいだしました。そして、枕元で浄土宗の読経がゆっくり長く行われました。勿論、枕元には経机がおかれ、お灯明やお線香、それにお花と水などが供えられて、人が死ぬとすぐにあげられる枕経（まくらぎょう）の形をとりました。

私は祖母の顔がよく見える場所に坐っておりました。読経の間、祖母は闘病で疲れ果てた両掌を出して、目をつぶったまま合掌をし続けておりました。時々、口もとが動いて、耳をよせて聞くと、それはナマダナマダナマダでした。読経がすむ頃は、祖母は静かな寝息を立てておりました。そして、それっきり病の疼痛が嘘のように消えて、安らかな眠りが最後まで続きました。いよいよ臨終となって、私が祖母の唇を水で濡らしてあげたときには、祖母は実に平和ないい顔でした。「オバチャ（祖母のことを私たちはオバチャと呼んでいたのです）ごくろうさまでした」と私はつぶやきました。祖母の人生の終りに対して、私はお念仏よりもさきにこの言葉を出してしまったのでした。私が旧制の高校を卒業して一浪していた頃なので、そのときの情景を今でもありありと覚えております。

祖母は本当に信仰の厚い人でした。私は三男坊だったせいか祖父母に可愛がられて育ちました。祖父が昭和五年に亡くなってからというものは、私は祖母のお座敷に同居の形となり、祖父の机で勉強しておりました。祖母は畑仕事と漬物に熱中していたと同時に、針仕事も上手でした。そして針仕事をしながら時々浄瑠璃をうなることもありましたが、大体はお念仏を唱えることが多く、私に話しかけるのも仏さまのことが随分たくさんありました。

私の家の菩提寺は、弘前市にある天徳寺という浄土宗の古いお寺でして、私の祖父も父も檀家総代をつとめておりました。祖母は、私が小学生の頃からよく私をつれてお寺参りをするのを楽しみにしていました。私の知っている限りでは、祖母は経本をよんで読経するわけではなく、ただひたすらにお念仏を唱えるだけでした。わが家のお仏壇を毎朝時間をかけてきれいに掃除し、朝夕これまた時間をかけてお念仏をあげておりました。ただ時々私に向って一枚起請文を読んできかせてく

れました。祖母は一枚起請文サマと、サマをつけておりました。
当時、私の兄二人が病気のため二人とも十二、三歳で若死していたので、多感期の私は「死」の問題について内外の書籍を読みあさっておりました。天徳寺の和尚さんからもいろいろと教えてもらったりしました。当然、私は宗教の領域にも入りこんで生意気な意見を吐いたりしました。今思うと本当に馬鹿だったのですが、私は青臭い宗教論を祖母にぶつけたりしました。そんな時には、祖母は一枚起請文サマを読みかえすだけでした。
祖母は法然サマの話をよくしておりました。しかし、法然サマのどこが偉いのかではなくて、法然サマはありがたいお方なのだの一点張りで、いうならば無条件降伏でした。ましてお釈迦サマとなると、ただひれ伏すだけで、苦行なされたり悟りをひらかれたりなどのいきさつは、祖母にとってはどうでもいいことのようでした。それらのことについて私が質問したり反論したりしても、祖母の答は一枚起請文サマだけでした。
祖母が去って四十四年たった今日、私は毎晩仏壇で短いお経をあげております。「阿弥陀仏の光明は遍く十方の世界を照し、念仏の衆生を摂取して捨て給わず。あとはお念仏です。南無阿弥陀仏、何という偉大な哲学でしょう。しかしこれを哲学だなどと考えず、無心に唱えた祖母は、私の何倍も何十倍も偉い人でした。だからこそ、祖母は生きてるうちに枕経をあげさせ、安心してみほとけの招きに応じたのではないでしょうか。キリスト教では、幼き者の目にこそ神の姿が映ると教えているそうですが、祖母は信仰の上では臨終のときまで幼き者の目をもっていたと思います。祖母の目には仏サマのお姿も、如来サマの世界もはっきり映っていたのでしょう。これが真実の信仰なのでしょう。
学とか智などのカビをはらって、私も祖母の信仰を真似たいと思っております。

浄土句集

一田牛畝選

焚妻が眉ひきよせて毛虫焼く　　福岡　荒牧　還愚

評　お寺の境内には沢山樹木があって、その木々に毛虫がつく。取った毛虫を焼くのが僧の妻の役。焼かれる毛虫を可哀相と思うのか、それとも煙に眉をひきよせているのか、何れにしても憐れである。

水打って裏町昏るゝ煮物の香　　東京　真野よし子

評　夏の夕はまだまだ暑いのである。表も裏も開けっ放して水を打っては風を入れている。台所では夕餉の準備中で、その香が表までも流れている、如何にも裏町らしいところをよく捉えている。

盆迫る何かと老の気忙しく　　福岡　高良　慈風

評　盆が近くなれば老人は色々と忙しいのである。仏を迎える準備や中元のこと等で、年を取れば取る程、自分のこと以外の雑用が増してくるのである。

湯上りの浴衣に今日もつゝがなく　　三重　山田　うた

評　一日中の汗を流して浴衣を着れば疲れも癒され、しみじみと今日一日が倖であったことが喜こばしいにちがいない。

年寄りは年寄り同志端居かな　　東京　新井　新生

評　若い者とは話が合わないのである。年寄同志の端居であれば、色々な苦労話に花が咲くのである。現代の若い人達は毎日正月の様な御馳走ばかりである。戦時中の事を話しても駄目である。

梅雨晴れに門主卒寿の御晋山　　大分　丹羽　難中

評　卒寿（九十歳）の門主なれば総本山知恩院の九十二歳の門跡ならん。梅雨のさ中であったが御晋山を祝うが如く梅雨晴れの華頂山で実に浄土宗の大慶日なりし。

父母に詫び魂まつる死刑囚　　福岡　国友　星畝

評　作者は福岡刑務所の死刑囚の教誨師である。こんな子を産んで先祖に相すまぬと泣いて死んで行った父母の魂を教誨堂に迎えているのである。

網代笠きりりと舞ふ妓夏祭　東京　真野　竜
形見分けひとまずすみし盆の月　東京　阪入志津枝
台風の雲流れ去り一つ星　東京　満尾衣有子
水冠の透けて涼しき緋衣の僧　東京　栗原やえ子
誰彼に似し石仏や夏木立　東京　田中　秀代
洗髪巻いて踊子らしき娘よ　東京　猪瀬　幸子
終りたるつつじを摘みに僧忙し　京都　安藤　寛
菜殻火の煙たちこめ昼暗し　福岡　権藤みきを

露涼し芝生の素足心地よく　福岡　上滝津弥音
連れだちて流るゝ灯籠あの世まで　山口　上野　明達
施餓鬼会の散華わけあう善男女　東京　吉田ゆきゑ
潮騒に夏の名残りは足速に　三重　山田　うた
鎌を研ぐことにも慣れて草を刈る　三重　森　静枝
暑き日の間違ひ電話多かりき　山形　松田　光誉
猫屈み甕の水飲む暑さかな　山形　松田　允子
欄間よりさし入るあかり寝待月　群馬　島津　か寿

涼み台流星と見し飛機の過ぐ　福岡　高良　幸代
句碑よぎり雨空に飛ぶ秋の蝶　東京　松濤　敏江
何よりも心軽々洗ひ髪　東京　小笠原香祥
冷奴やゝ大きめに切りにけり　東京　栗原とも子
百日紅花笠の如屋根飾る　東京　末常てる子
園児等の空翔ける声夏木立　東京　吉原登起子
亡き父と共に拝みし盆の月　失　名
十夜諷誦声を落して逆縁を　一田　牛畝

表紙のことば

「武甲脱秋」
―円融寺観音堂―

大西耕三

円融寺は秩父観音霊場の第二十六番目の札所である。七、八年前秩父に墓地を購入した御縁で、札所三十四ヵ所を巡ったことがある。

江戸時代の巡礼は笈摺を背に、菅笠、脚絆、甲掛をつけ、草鞋をはいた姿で、一ヵ所毎に納札を打ちつけて巡拝した。霊場のことを札所というのも、又巡拝することを「打つ」というのもそれによるのである。

近頃は大分観光化されて、バスによる札所巡りも行われているが、わずか二日間で終ってしまうバス巡礼では、当時の人達の気持も理解出来ないし、その土地の純朴な人達との交流も期待出来ないので、出来得る限り昔の巡礼の歩いた道を辿ってみた。

武甲山は秩父の象徴だと云われるが、確か

に札所を辿っていると、何処へ行っても、必ず武甲の姿があり、或時はやさしい姿を見せ、又或時は岩肌を露出した男性的且つ秀麗な山容を見せ、私の目を楽しませてくれ、疲れた気持をいやしてくれた。

標高一、三三六メートルの武甲山は、秩父の人々にとっては「武甲あっての秩父」なのである。

武甲は秩父古生層からなり、北斜面には東西に長い石灰層が分布しているので、石灰およびセメントの原料として採掘され、そのために山容は年毎に変貌して、男性的な岩肌を露出している。近年は特にその変貌ぶりが著しく、確か、登山も禁止されたと聞いている。

二十五番までの札所への道はゆるやかで、苦しいと思うような場所はほとんどなかったが、円融寺観音堂への道は、巡礼が必ず体得しなくてはならない、何ともいいようのない霊場だけが持つ異様なきびしさがあった。

秩父の霊場もこの辺から様相を一変し、愈々深い山間に入る。三百余談の苔むした石段を登り、それが切れた処から自然石の段になり、それを登りきれば舞台造りの観音堂が武甲山と相対して山の中腹の、嶮崖の上に建っている。

観音堂の舞台に立つと、武甲山の岩肌を露出した男性的な姿がすぐ目の前にあった。

時々ダイナマイトの音が轟くと、岩片のくずれ落ちる音だけが、静かな山間をいつまでもこだましていた。

随筆　日本よい国

大成善雄（おおなりぜんゆう）
（山口教区教化団長
岩国市称光寺住職）

先日テレビで犯罪の発生に関する、統計が報道されているのを見ていると、強盗殺人といった凶悪犯罪の人口当りの発生率は、日本に比べてアメリカの方が百十一倍も多いとのことである。

日本の犯罪も年を逐って凶悪になっているけど、アメリカに比べたらまだまだよい方である。しかし気をつけないと次第にアメリカのようになって行くのではないかといささか心配である。

日本のよい点はこの他に経済力の根強さも挙げなければならない。先年のオイルショックでも、日本は石油の九十九%以上を輸入に頼っており、しかも電力も火力発電が主になっている現状では他のどの国よりも真っ先に行き詰るはずなのに依然として強い経済力を失わないのは、いったいどうしてであろうか。世界中から不思議がられているようだけど、その理由について私は、勿論教育水準が高いことが第一の理由であろうけれども、第二に国民の間に根の深い対立と抗争がない点を挙げなければならないように思う。

会社の労務管理でも西洋諸国のように、異民族が混っていると、監督する人がよほど事細かに指示しないと、

ちょっとでも言い落した隙があるとすぐ手違いを起してしまう。また中には隙があったら破壊してやろうというレジスタンスがひそんでいたりするといったことが、日本には極めて少ない。日本では一般にみんな協力的で、仕事の指示でもツーといえばカーと直ちにその意向が了解せられて、極めて能率よく事が運ぶ点は、おそらく世界一ではなかろうか。日本人の国民性がこのようになった原因として私は、これまで八百年の長きにわたって、ご先祖の心をなぐさめ、培って来た法然上人の教えのことを考えずにはおられない。

法然上人の教えは極めて民主的であって、一切衆生が誰でも平等に往生でき、誰でもが、最高の位であるところの仏様にならせて頂けるのだという、仏教の慈悲に救われていることによって、心の奥底に安らぎを頂いているからではないかと思う。

日本でも労働組合の指導原理はマルクスの階級闘争やレジスタンスであろうけれど、一般の日本人にはなかなか定着しないようである。

今人類にとって、いや地球上の全生物にとっても最大の問題は、核兵器の増強ということである。現在の備蓄だけでも全部を爆発させたら、全人類を三十回も殺せるし、その放射能汚染で地球上の全ての生物が生きられなくなるらしいけど、もしそれ程ではないにしても、その方向に向って大国の国家財政の大半が使われていることは、卑近な例でいえば、傍の人が、人を殺すために一心に出刃包丁を磨いでいるようなもので、決して尊敬に値する姿ではない。現に米ソがそれをやっているのに、日本人は底抜けの人の好さで、今年も国防予算だけを増強させられていて、平和憲法をもった独立国、唯一の核被爆国であり、不殺生を説く仏教の国の国民としての自主性も見識もないように見える。

しかし真の相手の主体性を認めた上での自発的な自覚を促すためには、日本人の底抜けのお人好しでありながらの発言の方がよいのかもしれない。――しかし西洋人にその能力があるかどうか疑問だけど――。それにしても日本人としてのそれなりの自覚だけは是非もたなければ

ばならないことである。
仏教は世界で最も平和な教えである。この教えに恵まれた私どもが、この教えによって、ほんとうに人の心を打つ慈悲が行ぜられることだけが、人類を戦争による絶滅から救い得る唯一の道ではないだろうか。
「戦争は人の心の中で始まる」という国際連合憲章の前文冒頭のことばはほんとうである。そして人の心の一番奥底、その根底を培うものは宗教である。マルクス主義のように宗教に代る位置を占めている思想もあるけれど、このマルクス主義を生み出した西洋のキリスト教の限界についても我々は認識を深める必要があろう。キリスト教やその母体のユダヤ教の神は、天地万物の創造主であって、我々人間がそのような神になることは出来ないし、その全知全能なる神の智恵を窺い知ることも出来ない。しかしそのような神は現代では単なる神話であって、もし神が人間を(アダムとイブを)己に似せて作り、その為の楽園を用意して生活させ、そして愛があるのであるのなら、なぜ悪魔の存在を許し、彼等の誘惑を差し止めなかったのか、悪魔の動きを知らなかった、或いはどうにもできなかった、というのならの全知とも全能ともあるいは愛があるともいえないではないか。
この点釈尊は、このような詮索を我々の認識の能力を超えた事に対する戯論であるとして、毒矢の譬えをもっていましめられ、ただ苦を滅する道として、正見以下の八正道をすすめ、「法界に帰依せよ」と教えられた。
苦とは「私の気にいらん」ということであり、帰依はその私が主人であるという我見・我執を超える道であり、また宇宙法界は無限であって、それへの帰依は即ち解脱への道でもある。と同時に自由な創造と発展の許される命栄える生き方でもあって、これはまた科学の精神とも一致する。
この点キリスト教の神話はまだ幼稚である。コペルニクスが発見した地動説を三百五十年もたった今年になって、やっと公会議の議題として採り上げようか、等、実に頑固な自己主張であって、自由解脱な生命の発展に対しても、あるいは科学の成果に対する公正な評価の能力も、誠に貧弱な宗教であって、仏教徒から見れば何等尊敬に値するものではない。

しかし現代の日本には、西洋崇拝の風潮が満ち満ちている。好奇心に富みしかも謙虚さという美徳をもった日本人と、征服欲と競争心と自己主張にみちた、近代西洋人との出合いの結果がそうなるのは当然であるけど、日本人の尊敬している彼等が、宗教文化においては、苦滅と真理と平和への道、無我の真理をまだ理解し得ていない、未だ小さな自我の主張を超克する仏教の真理を理解し得ていない。誠に程度の低い精神の持ち主であることだけは心得ておかないと、人類の将来を誤ることになる。

彼等の神が全知全能であるのなら、東洋の仏もその分身・権現として統摂する能力がなければならない。異教を敵視し、それと争う神は狭く小さな神であって全知でもなければ全能でもない。

これらのことによって我々が最も迷惑を被っているのは、宗教改革以来のキリスト教の宗教戦争の為に我国の公教育においても宗教教育が禁止されているという真に悲しむべき現状である。宗教戦争はキリスト教内でのことであって、日本の仏教が宗教のために戦争の主導者になったのではない。特に終戦後、彼等は戦力の破壊の名のもとに日本をキリスト教化しようとして、日本文化の断絶にあらゆる方策を講じている。従来の文章を読めなくする漢字制限、国語教育の字数が一流国の中では特別に少なく、その代り英語に教育膨大な時間と労力を費やさせる。と同時に日本人に劣等感を植えつけ、英語の力がなければ学位は取れない仕組みをつくり、家庭に伝わる仏教的な伝統文化を抹殺する為に、父母の権威を否定する民主々義なるものを、新しい真理であるかのように称導する等、彼等の社会政策は極めて老獪であって、いちいち枚挙にいとまがない程である。このような状況下において、私達浄土教徒は、今こそ真剣に教えの真価を学び、更にこれを世に伝えなければ、人類の日が暮れるのに間に合わないことになりかねないことを深く憂えるのである。

念佛ひじり三国志（九十）

―法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵　松濤達文画

一

水無瀬から引揚げた住蓮は、その夜獅子ヶ谷の精舎で安楽房遵西と会った。

陽のあるうち彼は吉水の禅室にいた。その後の動きを聞き出そうとしたのだが、外界と接触する教団のおもだったひじりたちは誰ひとり登嶺してこなかった。法然も病いに臥しているという。余計な心配をかけるにしのびない。獅子ヶ谷で待つことにしたのである。

「おぬしが出たすぐあとに……」

と安楽房は吉水での〝入れちがい〟を詫びながら精舎へはいってきた。

住蓮はすぐに、水無瀬離宮から空阿弥陀仏がもたらした小袖の切れはしを示した。焚き火の燃えカスのような炭で書きなぐった報告文だった。

――御房ただ一人。

安楽房は俄かには判定しがたい表情だ。

「これは……」

「空阿弥陀が水無瀬御所で感じ取った敵のねらいじゃよ。ねらいは法然お上人さまだけを、ということじゃ」

「やっぱり」

「何かこちらでも？」

「うむ。じつは善恵房がな、ここ一両日来、慈円僧正に接近して……」

掴んだ情報によると、後鳥羽院は法然を昨年建立した白川御所あとの最勝四天王院へ押しこめようと意図しているらしい、というのである。

「四天王院へか」

「そうだ。念仏をやめさせて、あそこで祈祷を」

「お上人さまにそんなことが出来ると思うか」

最勝四天王院が建立された目的は唯一つ、鎌倉武家政権の調伏を祈ることであった。

建立は建永元年(一二〇七)の六月で、尊長僧都がこの寺の執行へ坐りこんだ。後鳥羽院がそこの〝名所障子和歌〟として、

み吉野の高嶺の桜ちりにけり
　嵐も白き春のあけぼの

と詠んだり、また同じころ住吉社の歌合せで、

奥山のおどろが下もふみわけて
　道ある世ぞと人に知らせん

と強い調子で倒幕の決意を歌いあげている。

庶民大衆のあいだへ広く浸透した念仏教団の盟主法然をこの最勝四天王院へ押しこめ、倒幕呪咀の護持僧とさせてしまうことは、たしかに一石二鳥の妙策だったかもしれない。内には専修念仏の徒を断圧、離散させることが出来る。外には法然を慕う鎌倉武士への強い牽制ともなる。

「そのことはもうお上人さまに申上げてあるのか」

住蓮はとまどいながら安楽房の顔を見た。

「いや、未だだ。だいいちそのようなお話が持ちこめると思うか」

「うむ……」

「叡山を去られたお上人の目的は、仏法を他への呪いに利用することの非を捨てられるためであった。それが今、鎌倉調伏の護持僧に成りさがるなど」

「しかも念仏をやめてのう。どう対処するつもりじゃ」

「わからん」

安楽房はがっくりと匙を投げた。

「六波羅では?」

北条武士の腹の内も確認しておきたかった。すでに安楽房はそちらを打診してあるはずだった。

「北条と申しても所詮は坂東の田舎武士よなあ。戦さには弱くともこのあたりの駆け引きにはとんと暗い。まして神仏の問題となると……」

「これはやはりお上人ご自身の胸をおうかがいする以外に方法はないな」
「わしもそう思っとる。とにかく御所側は、小者童子を責め立てて非常の切れはしを吐き出させては、その罪をすべて御房一身へかぶせてくる。御房を奪われてしまっては如何に専修念仏とは申せ……」
「空洞のあいた大木みたいなものじゃからのう」
住蓮たちの密議もそこで終った。獅子ヶ谷村の善男善女たちが精舎へ集ってきたからである。
六時礼讃を始める前に、安楽房はいつものようにひとくさり説法をした。巧みな話術と迫進性のこもる叙述で信者たちの心を強く魅きつけた。
安楽房が今宵えらんだ話題は「法句経」にある女修行者チンチャー・マーナヴィカーの奸計だった。
住蓮は、もちろん知悉している話だったが、きわめて新鮮な感触で耳を傾けた。感触が新鮮になったのは、ゆき詰まった現状を打開するヒントがこの説話にふくまれているように思われたからである。
でも未だ、それをどう活用したらいいのか。そこまで思念は熟し、まとまってはきていない。
チンチャーは美貌なバラモン行者だった。たまたま祇園精舎があるコーサラ国の首都サーヴァッティへくると、仲間の行者たちが憂色を深くして、しょげかえっている。原因を問いただすと、祇園精舎に滞在する修行者ゴータマ（釈迦）のせいだという。
都の大富豪であるスダッタ（給孤独）長者がスポンサーについてしまい、都人たちもみなゴータマになびいて、自分らに布施してくれる者は誰もいなくなってしまった。
「そんなことを言われたって、わたしのなではどうにもなりませんわ」
「いや妹よ、そなたなら我々を救うことができる」
「どうやって」
「ゴータマの評判を蹴落すのだ。妹の、そなたの美貌と艶色で」
「でもゴータマというお人は、なかなか立派な人格の持主だと聞いています」
「いや、これは人格の問題ではない」
と修行者たちはチンチャーに秘策をさずけた。
チンチャーは夕方になるのを待ちかねて、派手な赤い

<祇園精舎小景>

衣服に身を包み、花束や香壺を持って祇園精舎へ近づいた。折からゴータマの説法を聞き終え三々五々街へ帰ってくる善男善女たちとすれちがった。

「おや、こんな時刻にどこへゆくの」

声をかける者もいた。チンチャーは身をくねらせ全身から色気を発散させながら、

「祇園精舎……いいえ、わたしがどこへゆこうと勝手でしょう」

と思わせぶりな言葉を洩らした。

じつは祇園精舎へはゆかず、すぐ近くにある同じバラモン仲間の家に泊った。

朝になると街の方へ引き返してくる。精舎へ向う信者の群れと再びすれちがった。

「昨夜はどこへ泊ったの」

「どこへ泊ろうと、あなたの知ったことじゃあないでしょ」

言葉では突き放したがチンチャーは艶然たる笑みをその美形にふくませた。

二

獅子ケ谷精舎での安楽房の説法はいよいよアブラが乗って佳境へはいってゆく。

バラモンの女修行者チンチャーは、こうして毎夕毎朝、祇園精舎の周辺をうろつくようになった。半年たち一カ月が過ぎると、往きかう善男善女に、

「わたしはゴータマ御自身から直接、お説法を頂いているのよ」

口外しはじめる。

でも仏法の信者たちは、あのお釈迦さまが「まさか」と信じなかった。

さらに三月、四月が過ぎる。

女修行者チンチャーはお腹に白い帯を巻いて歩きまわった。そして公然と言いふらすのだった。

「とうとうゴータマさまのお恵みを受けて、あの方の子を宿すことが出来ましたわ」

信者たちはびっくりして、

「ゴータム仏陀に限ってそのような不しだらをなさるはずがない。そのふくらんだお腹はいずれ正体も知れぬ男のタネであろう」

とやり返したがチンチャーは冷然と笑って、

「嘘か真実か、いずれゴータマ自身の口から明らかにされるでしょう」

宣言した。

さらに四カ月ほどが過ぎて、その午後、祇園精舎にはゴータマ釈尊の説法を聞くために善男善女がびっしりと詰めかけていた。ゴータマは一語一語を噛みしめるように仏法の真意を説きつたえてゆく。私語する者は一人もおらず真剣な眼ざしで聞き入っている。

まさに説法が最高頂に達したときだ。大衆の座から紅衣の女人がすっくと立ち上がり、恐れげもなくゴータマの前へ進み出た。

「おえらい修行者さま。あなたのお声の何とおやさしいこと、お唇の何とやわらかな感触ですこと……」

うっとりと見上げるのだった。

その女人、紅衣の下でお腹はぷっくりとふくれあがっていた。誰が見ても臨月の妊婦だった。

「……」

ゴータマは一瞬言葉を停め、もの静かな眼で彼女を眺めやった。

女は言葉をつないだ。

「おえらい修行者さま。わたしはあなたの限りないお情けを頂戴して子供を宿しました。すでに臨月をむかえました。ここでうごめくわが子は、お父さまであるあなたの愛情をどんなにか待ち望んでいることでしょう」

「……」

「それなのにあなたは産室の用意もしてくれません。産婦の食べ物のことも考えてくれません。ご自分で出来なければ、立派なお弟子やお金持の信者が沢山いるではありませんか。彼らにやらせたらどうなのですか。あなたは、わたしの身体を楽しみ放題楽しんで、お産のことは知らん顔なんですね」

恐るべき告発であった。聴問の大衆は思わず息をのんでゴータマとこの妊婦を見つめる。妊婦が女修行者のチンチャーだったことは言うまでもない。

ゴータマ釈尊はもの静かに口をひらいた。

「妹よ。あなたの告発が嘘かほんとうか、その真相を知っているのはわたしとあなた二人だけだ」

「そうよ。もちろんそうですわよ。あの二人が楽しんだ夜な夜なを知っているのはあなたとわたくしだけです。そしてこの見事な愛の結晶も……」

チンチャーは勝ち誇ってふくれた紅衣のお腹を撫でまわしている。

余りにも得意満面のためチンチャーは、ゴータマの眼がある一点を注視している事実に気ずかなかった。ある一点とに、彼女の足もとであった。

足首のまわりに四匹のネズミがたかっていた。ネズミたちは、やがてチンチャーの裾裏、脛から太腿の方へ駆けあがっていった。それでも気づかない。

「この人は、何も答えようとはしない。ここにいる皆さんが証人ですよ。このゴータマは口では高邁な理屈を並べたてながら、若い女信者には貪慾に手をつけて、わたしのように子をハラませてはかえりみようとしない。口先で多勢の人は救うかもしれないが、身体で泣かされているわたしのような女が幾人もいる事実を、皆さんは忘れてはいけません」

チンチャーも修行で鍛えた弁舌を持っていた。充分に一座を説得できる。大衆は複雑な眼でゴータマ釈尊を見た。

そのころ、チンチャーの体内へ這いあがった四匹のネズミは左右から彼女の腰に喰らいついていた。そこには

細紐がめぐらされてあった。歯をむき出してこの細紐を喰いチ切ろうとするのだった。
「さあ皆さん、この偽善者を追放しなければならない。土くれを投げよ。石つぶてで眼をつぶせ」
チンチャーが煽動の声を、身をゆすって叫びあげたとき、彼女の足もとで異和音がひびいた。すべり落ちた丸い木の盆が割れたのである。
この木のお盆は何であろうか。
一塵の風が祇園精舎を吹きとおっていった。風は女修行者の裾を、あられもなくまくりあげた。すっぽんぽんのおなかがさらけ出た。ああら不思議、臨月だったはずのふくれた腹がすんなりしているではないか。
今までふくれて見えたのは、足もとに落ちた木の盆を挟みこんでいたためだった。それを結びつけていた細紐を、四匹のネズミが喰いチ切ってしまったのだ。
信者たちはすぐにこのカラクリを見抜いた。チンチャーは丸い木の盆を腹にくくりつけて衣服でかぶせ妊娠をよそおったのである。
「この悪女め」
「み仏を誹謗するために企らんだな」
信者たちは口々に叫んだ。
チンチャーは居たたまれなくなって祇園精舎を逃げだしていった。
ゴータマ釈尊は終始黙ったまま彼女を見守り、そのあと前と変らぬ調子で説法を続けた。
チンチャーの奸計をくずした四匹のネズミを、法句経は天上にいます帝釈天が四人の天女をともなって釈尊の危難を救ったことになっている。
祇園精舎を逃げだした女修行者は、ひた走りに走っていたら大地が突然割れて、その穴へ吸いこまれてしまった。地底には火焔が渦巻き、無間地獄の入口であった。
真理をいつわり、嘘言をまき散らし、後生を信じない者は、どんな悪業でもやりかねない、とゴータマ釈尊は説かれたが、女修行者が落ちこんだ無問地獄の穴は後世になってもそのままの形で残ったという。天竺(インド)を訪れた中国僧の法顕や玄奘もこの遺跡を訪れて書きつたえている。雨が降っても絶対に水が溜まらない穴——無間地獄の入口だ。法顕は祇園精舎跡の東門を出て、北方へ七十歩いった地点と指摘している。
法顕は東晋時代の僧で平陽府武陽(山西省)の人であ

る。隆安三年(三九九)に長安を出発、敦煌から流沙を経てパミール高原を越えて六年後にインドへ入国した。以後は各地の仏跡を巡礼、サンスクリット語を学び、経典を写本し、さらにセイロン島へまで足を伸ばした。長安を出発したときは十余人の仲間がいたが、最後には法顕一人になってしまった。義熙八年(四一二)じつに十四年ぶりで南海を船でわたり、山東省へ帰ったのであった。

安楽房の説法は、信者たちの好奇の念を適度にくすぐりながら仏法の真髄を巧みに浸透させる効があった。

三

「昨夜の話だがな……」

と、夜も明けそめた東山の冬ざれ道を踏みながら住蓮は言いだした。

「法然の御房が四天王院へゆかれることか?」

「いや、おぬしがした説法じゃ」

「ああ、はらんだ女修行者」

「それだ。どうもあれを逆手に用いねばならないかもしれぬ」

「あれを逆手に用いるとは――」

「わしにも未だうまく言いあらわすことはできない。ただ釈尊が在世されていたころは正法じゃ。釈尊の正しさが帝釈天や四匹の白ネズミによって証かされた。ところが現在は末法末世じゃ。逆な立場でお上人さまの身を守ってゆかねばならんのではあるまいか」

「逆な立場とはどういうことだ」

「そこが未だこれこれじゃと言いきれん。いま少し機が熟してから」

「うーむ。その機が熟するとは」

「安楽房、一寸ついてきてくれ」

住蓮は俄かに歩幅をひろげた。

吉水の禅室へ登る華頂山の麓を通りすぎてしまった。どこまでゆくのだ、といぶかる安楽房を無視して歩き続ける。真葛ケ原をよぎって東の市に近い堤の下へ出た。

老松がお互いの身を寄せ合うようにして数本立っている。

「ここだ」

「この松がどうかしたのか」

「……」

住蓮はふり仰いで松の梢をあちらこちらと点検しはじ

「みながこの法然の身を思ってくれるのは有難い。だが法然はここ東山を離れる意志は全くない。東山がなつかしいからではない。ここだと衆生ともどもに念仏ができるし、みなに私の信心をつたえることができるからだ」

証空は言葉をさしはさんだ。

「四天王院へおはいりになれば、上皇や周辺の公卿たちに真の仏法をつたえることができるでしょう」

「いや、あの方々には慈円僧正のような立派なお人もいる。私が説くまでもない。私を必要とするのは武骨な野人であり、欲深い女人、五感にみちた餓鬼たち。この人々とふれ合えるならば必ずしもこの東山でなくてもかまわない」

住蓮はもはやこの師には一語の忠告も不必要だと思った。

証空も黙りこんでしまった。安楽房はやや挑発的に、

「しかし、御房が四天王院へはいることを拒まれれば、死罪に及ぶかもしれぬ、と座主の僧正はおっしゃったのではないのかな」

証空は弱々しく否定した。

「いや、それほど四天王院にはこだわってはおられませんでした。死罪なぞめっそうもない。ただ、ただ……」

「ただ、何だな」

「専修念仏の唱導を、しばらく休止なさったがよろしいとのお仰せでした。停止ではありません。休止でございます」

「休止か……この点は如何ですか」

安楽房は法然へ眼を向けた。

声は低いが、力強い語気であった。法然はきっぱりと言いきった。

「仏法救いの唯一つの道、念仏の唱導に休止も停止もあり得ない」

一座は全身を耳にして、次の言葉を待った。もはや法然以外の言葉は存在し得ないはずであった。

「念仏することで、たとえ死罪になろうとも、それは阿弥陀如来の浄土へ急ぐことであって、いささかも道を踏み誤またない。法然は悦んで念仏しつつ殺されよう。だから休止も停止もあり得ない」

えぐるように法然の言葉は念仏ひじりたちの胸を刺しつらぬいた。迷ってきた者は粛然と襟を正したし、信じてきた者は決意をさらに新たにするのであった。(つづく)

◎読者の皆様へのお願い——

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしましたが、その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただいてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、**内容**　自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）

一、**枚数**　四百字用紙五枚程度

一、**締切**　毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一ヵ年　金三、〇〇〇円（送料不要）

浄土　四十七巻　十一月号

昭和十年五月二日　第三種郵便物認可

昭和五十六年十月二十五日　印刷

昭和五十六年十一月一日　発行

編集人　宮林昭彦

発行人　佐藤密雄

印刷人　関　二三男

印刷所　長谷川印刷㈱

東京都千代田区飯田橋一－十一－六

発行所　**法然上人鑽仰会**

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二　振替東京八－八二一八七番

第四十七巻 第十一号
昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）毎月一回一日発行
昭和五十六年十月二十五日印刷 昭和五十六年十一月一日発行

発展する浄土宗開教区

〝法は人による〟

正法弘宣はあなたによって。古来，法は独り弘まるものではなく，人によって弘まるといわれております。

開　教　使　募　集

資　格　浄土宗教師資格取得者（見込み可）にして
　　　　浄土宗開教使養成機関の履修者

赴任先　ハワイ，北米（ロスアンゼルス），南米（ブラジル）
　　　　のうちの希望地

浄土宗南米別院本堂

詳細についての御照会は――

浄土宗開教振興協会事務局

〒605　京都市東山区林下町400
浄土宗宗務庁内
TEL　075(525)2200（代）